

亡郷

島田 たらう

登場人物

慎次郎 元将校（二十代半ば）
千代子 元慎次郎の婚約者（九十年代）
留蔵 元福島の漁師（七十代前半）
正子 留蔵の娘（四十代）
千秋 高二（十七歳）
尚美 高二（十七歳）
敏夫 土建屋（二十代）
マリ 敏夫の彼女（二十代）
三郎 千代子の弟（八十代後半）
老人 （八十代後半）

1・プロローグ

一九四三年四月。日比谷公園内のベンチで話し合っている、軍服姿の慎次郎と、モンペ姿の千代子。時々、桜の花びらが風に舞っている。遠くから『誰か故郷を想わざる』（唄・霧島昇）の歌が聞こえて来る。

慎次郎 元気そうでよかった。

千代子 本当に驚きましたわ。だって、突然なんですもの。すっかりあわててしまっ、この通り普段着のまま飛んでまいりましたの。

慎次郎 今回の帰国は急に決まったんです。上官の軍務の付き添いでね、東京の滞在はたったの一日なんですよ。でも、千代子さんに会えてよかった。

千代子 あたくしも、慎次郎さんの元気なお顔が見られてとても嬉しいですわ。横浜の実家には寄られたのですか。

慎次郎 いえ、時間がないので連絡しておりません。

千代子 あらまあ、ご両親だって慎次郎さんのお顔を
見たいでしょうに。
慎次郎 止むを得ません。この日比谷公園も変わつ
ておりませんね。このベンチもあの桜の木も私が
学生の時のままです。
千代子 慎次郎さんと、初めてお会いしたのはこの
公園でしたものね。
慎次郎 歩いていたら千代子さんに、わざとぶつかっ
て。
千代子 ぶつつかるのは慎次郎さんの特技
なのでしよう。だって、早稲田のラグビー選手だ
ったんですもの。(笑う)
慎次郎 早いものですね、あれからもう二年になり
ます。この前の手紙によりますと、勤め先が変わ
ったようですね。
千代子 はい。今は東都百貨店で部長室の文書係り
をしています。あら、冷たい風！(着物の襟を押
さえる)昨日はとても暖かかったのに。
慎次郎 雪でも降りそうな空模様だ。桜が咲いてい
るといふのに。東京の空は私が来たのを怒ってい
るのかな。
千代子 そんなことありませんわよ。花冷えて言
うじゃありませんか。あっ、そうそう。慎次郎さ
んが探しておられた早稲田の後輩の加藤さん。居
所が分かりました。
慎次郎 加藤の？
千代子 お知らせしようと思って、急いで書
き写してまいりました。(メモを渡す)
慎次郎 「中支派遣軍遠藤部隊気付、小坂部隊」中
支だと私のいる済南からだいたい離れていますね。
そうか、加藤の奴中支に来ていたのか。帰ったら
すぐに手紙を書きます。ああ、一郎兄殿、無念で
ございました。
千代子 ありがとうございます。兄はビルマ
の地で精いっぱい戦ったと思います。(周りを確認
して)あのね、届いた白木の箱にはね、髪の毛一
本、遺骨のかけらも入っていないかったの。ただ
ね、「名誉の戦死を遂げられました」と書かれた紙
切れが一枚入っていただけでした。本当はこんな
こと口に出してはいけないことなのですけど。

慎次郎　　そうでしたか・・・ところで、二郎兄殿は
今、どちらに？
千代子　　二郎兄は、あまり手紙をくれませんの。で
も、この前来た手紙はシンガポールからでした。
詳しいことは書いておりませんでしたが、元気に
しているようです。あの、今ね、我が家では問題
が起こっておりますの。
慎次郎　　問題？
千代子　　末っ子の三郎がね、兄貴の敵を取ってやる
んだって、学校を辞めて海軍兵学校に志願するつ
て言い出したんです。
慎次郎　　三郎君が？
千代子　　父は何も言わないのですが、母は大反対な
んです。もし、三郎に何かあつたら
跡取りが無くなるって。「わたしゃ、男の子なんか
生むんじやなかつた」って泣いてい
るんです。
慎次郎　　そうですか。
千代子　　慎次郎さんはどう思いますか？
慎次郎　　私は軍人ですから、三郎君の気持も分か
ります。が、三郎君はまだ十八歳でしょう。志願は
二十歳を過ぎてからでも遅くはないと思います。
千代子　　そう伝えておきますわ。
慎次郎（腕時計を見て）　ああ、もう、こんな時間か
：：。
千代子　　あら、もう、いらつしやるんですか。
慎次郎　　あと十分あります。千代子さんに会った
ら、あれも話そうこれも聞いてみようと思ってい
たのですが。
千代子　　今度はいつ頃、日本に帰っていらつしやる
のですか？
慎次郎　　私の帰還は来年の秋か、あるいはその翌年
の春になるかと思えます。今日お会いしたのは、
千代子　　この前の手紙に書いたことなんですが。
慎次郎　　読ませて戴きました。
千代子　　読ませて戴きました。
千代子　　話ください。
千代子　　あのお手紙、両親にも見てもらいました
の。
慎次郎　　えっ、ご両親は何て？

千代子 二人でよく話し合って、決めなさいって。
慎次郎 そうですか。それじゃ、それまで一年半、
もしくは二年。待っていてくれというのは、虫が
良すぎる話でしょうか。
千代子 あと二年とおっしゃいますと、昭和二十年
ですわね。その頃は、戦況はどうなっているのか
しら。
慎次郎 さあ、それは……。
千代子 あたしは待ちます。慎次郎さんを信じて。
慎次郎 ありがとうございます。
千代子 お手紙書きますから、慎次郎さまもご返事下
さいね。
慎次郎 勿論、書きます。(声をひそめて) 私はどん
なことをしても、必ず生きて帰って来ます。

頭上を飛んで行く飛行機の爆音。見上げる
二人。(暗転)

2・日比谷公園

二〇一四年八月、セミの鳴き声に混じつ
て、車のクラクションや街頭の騒音が聞こ
えている。木陰に二つのベンチがあり、そ
の一つでは留蔵があぐらをかいて、一人将
棋を指している。やがて、軍服姿の慎次郎
がきよろきよろと周りを眺め、日本手拭
で額の汗を拭きながらやって来て留
蔵の隣のベンチに座る。そして、肩
に掛けた古ぼけた水筒の水を飲む。

慎次郎 すっかり変わってしまった……
あの、爺殿！ 爺殿！
留蔵 ああ？(周りを見て) おらが？
慎次郎 そうであります。
留蔵 お、お前え、(慎次郎の格好に驚く)
慎次郎 将棋でありますか、自分も将棋は好
きであります。
留蔵 そうが。

慎次郎 爺殿、少々お訪ねいたしますが、あそこに見えるレンガ色の建物は、日比谷公会堂でありますか？

留蔵 ああ？ ああ、あれが？ そうみてえだな……

慎次郎 爺殿は、東京の住人ではないのでありますか。

留蔵 おらが、おらは福島だ。

慎次郎 福島といいますが、東北地方でありますね。爺殿は福島から来られたのでありますか。

留蔵 その爺殿は止めてくれ。おら、まだそんな歳じゃねえ。それより、お前えのそのカツコウ……

慎次郎 はあ？

留蔵 (つぶやく) ええ若者が、昼間っからコスプレか……

慎次郎 すると、ここは日比谷公園でありますか。

留蔵 あそこにそう書いてあったべ。

慎次郎 やはりここでありましたか。宮城はどちらの方角でありますか。

留蔵 ドームだったら、こっちじゃねえど。

慎次郎 どーむ？

留蔵 東京ドームだったら、おらも何度が行ったことある。水道橋だ。お前え、プロ野球見に来たのが？

慎次郎 野球じゃなくて、宮城です。

留蔵 だが、巨人のいるドームだべ。

慎次郎 天皇陛下が住んでおられるところでありませう。

留蔵 なんだ。そりゃ、皇居だべや。

慎次郎 こうきよ？ 今は宮城のことを、こうきよって呼ぶのでありますか。

留蔵 何ゆってんだ、お前え？

慎次郎 その、皇居はどちらの方角でありますか。

留蔵 (適当にあごで指す) 向こうだべ。

慎次郎 そうでありますか。(示された方角に最敬礼をする) 爺殿。実は自分は、この、日比谷公園に来たのは戦後初めてなのであります。

留蔵 ああ？

慎次郎 昔とは、すっかり変わってしまったでありますから。

留蔵 何でもええが、その、「爺殿」は止め
れって。それがら、「であります」も止めれ。(尻
をかいて)このへんがむずむずしてしようねえ。
慎次郎 失礼いたしました。以後、気を付けるであ
り……、もとへ、気を付けます。
留蔵 わしは留蔵、みんな留さんって呼んでる。
慎次郎 留さんですか、

高齡で品の良さを思わせる千代子
が高校生の千秋と尚美に伴われてやって来
る。話しながら、慎次郎の座っているベン
チに座る。千秋たちからは慎次郎と留蔵は
見えないが、慎次郎たちからは三人の姿が
見える。慎次郎は三人に次々と席を譲って
いるうちに、ベンチからはみ出して地面に
尻餅をつき、仕方なく立つ。

千秋 おばあちゃんから借りたこの戦地か
らの手紙をね、昼休み時間に校内放送で流した
の。そしたらさ、すんごかつたんだよ。みんな聞
き惚れて、どこの教室もシーンとしちまってさ、
職員室もだよ。

尚美 あたしたち二人で朗読したんだよ、バ
ックミュージックを入れて。そしたら学校
中の評判になっちまってさ。ねえ、千秋。

千秋 担任もマジ感動しちゃったの。「お
前ら、あの手紙何処から探して来たんだ」って、
しつっこく聞かれちゃった。

尚美 「北支の夏は、砂とほこりと太陽と熱
風と、人の心を干す味気無さの連続です。
秋はまた運動の時。軍務の余暇をグラウンド
ですごしています。澄み切った青空に蹴り
上げた楕円形のボールに、学生の日の感激
と精神を思い起こしました。「オイ、見ろ！

あの雲ニッポンの方に流れて行くぞ！
あれはニッポンに行くのだらうか」誰かが
叫ぶと、どの兵もどの兵も、真つ青な空に
浮かぶ白い雲を眺める。みんな無言のまま。

千秋 (立ち上がって歩き回りながら)

「今夜、二十日を過ぎる月は未だ昇らず、虫の音にふける大空は、星、星、星。大きく悠久に天の川が流れていきます。冷たく燃える星が、殊更大きい。この大空を貴女も見ているかもしれない。大空は不思議な力で、遠い国を、遠い人を思わせま
す。残念ながら消灯の時間です。この続きはまた」

慎次郎は急に何かを思い出して硬直する。千秋がぶつかりそうになるのである。あわてて避ける。そして、千代子を凝視したまま、留蔵の隣に座る。留蔵はあわてて将棋盤を引く。

千代子 あなたたち、この手紙暗唱したの？

千秋 だって、すんごくロマンチックな文章なんだもの。あたしたちね、演劇部なの。ねえ、尚美。

千代子 それで朗読がじょうずなのね。

尚美 ああ、あたしにもこんなラブレターくれる人いないかなあ。

千秋 無理、無理。今時手紙書ける男の子なんかいないよ。はい、この大事な手紙お返しします。

千代子 お役に立ってよかったわ。

千秋 それでは放送部の第二弾、インタビュ―を始めます。(ICレコーダーをセットする)

千代子 嫌だわ、インタビュ―なんて。

千秋 お願いします。どうしても必要なんです。

尚美 これは街頭インタビュ―。勿論、おばあちゃんの名前は出さないし。

千代子 そう。

千秋 (レコーダーのスイッチを入れ)

おばあちゃん、終戦のとき、何歳でしたか？

千代子 ええっ！ 歳がばれちゃうじゃない。(はにかんで肩をすくめる)

尚美 可愛い！ (千秋と顔を合わせてくすくす笑う)

千代子 戦争が終わった時、あたしは二十二才。

千秋 ということは、(尚美に) 今、幾つ？

尚美　　今年は戦後六十九年目だから、えーつと：
千代子　　ピンポン。
尚美　　うっそう、若い！
千秋　　マジで？　うちのおばあちゃん、七十八だけ
どさ、顔はしわとしみでくちやくちやだし、歯な
んかも総入れ歯だよ。朽ち果てるのも時間の問題
って感じ。
千代子　　そんな言い方、おばあちゃんに失礼でしょ
う。
千秋　　あっ、今のは冗談。とても優しいおば
あちゃんです。（尚美に）おばあちゃんって、美人
だよ。
尚美　　うん。背筋もしゃんとしてるしね。あの、そ
の年まで、若さと健康を保つ秘訣はなんですか？
千秋　　あたしも聞きたい。もしかして、エステと
か。
千代子　　あなたたちね、戦争のお話を聞きに来たん
じゃなかったの？
千秋　　あっ、すみません。では続けます。
尚美　　ちよつと、千秋。今、レコーダーのスイッチ
切った？
千秋　　あっ、ヤバッ！（スイッチを切り）いい
よ、後で編集し直すから（スイッチを入れて）え
ー、それは九十一歳のおばあちゃんにお聞きし
ます。集団的自衛権って知っていますか？
千代子　　ええ。知っていますよ。日本が攻撃を受け
なくても、仲良しの国が攻撃されたら、日本もそ
の国と一緒に戦うってことでしょう。
尚美　　すごい！　おばあちゃん。
千秋　　では、現政権は集団的自衛権の行使容認を閣
議決定しました。おばあちゃんは当然反対ですよ
ね。
尚美　　そういう誘導質問は駄目よ。
千秋　　あっ、ごめんなさい。では繰り返します。こ
の事を、おばあちゃんはどう思いますか？
千代子　　当然反対です。あたしね、もう、腹
が立って、腹がたってしょうがないのよ。
だあって、腹がたつてしょう。日本には平和憲法と
呼ばれている、立派な憲法九条と言うのが

あるじゃない。だから戦後六十九年もの長い間、日本は戦争に巻き込まれないで来たわけでしょう。あなたたちなら分かるわよね。

尚美 はい、分かります。
千代子 だから、自衛隊員だって一発の銃弾も撃つていないし、殺された人は一人もないのよ。それなのに、首相や集団的自衛権の行使に賛成した議員さんたちは、戦争の悲惨さをまったく知らないのよ。みんなもう少し日本の歴史を勉強してほしいと思うわ。無知というのは怖いものよ。だから、あんなひどい事を平気で決められるのよ。

千秋と尚美は圧倒される。

慎次郎 日本は、また戦争の準備でもしているんですか。

留蔵 そんなごと、おらには関係ない。

千代子 あら、どうしたの？

千秋 あっ、いえ。戦争を体験して来たおばあちゃんはずごく怒っています。

尚美 (声をひそめて) 千秋、あのこと聞かなきゃ。

千秋 えっ？

尚美 ほら、手紙の旦那さんのこと。

千秋 ああ、それではここで、質問を変えます。先日、私たちの高校で校内放送をさせて戴いた手紙のご主人は、今どうされているのですか？

千代子 あたしは、生涯独身なの。
二人 えっ？

尚美 どうして？ じゃ、手紙の人は？

千代子 きっと、その事を聞かれるのじゃないかと思つてね、もう一通手紙を持って来たのよ。

よ。この手紙はね、昭和二十年のお正月に戴いたものなの。
千秋 昭和二十年って、終戦の年だよ。

千代子 そうよ。

千秋 (封筒を受け取って) 読んでもいいんですか？

千代子 読んで頂戴。

千秋 はい。(レコーダーのスイッチを切って手紙を
読もうとする)

尚美 (横から取り上げ) あたしが読む。

「先日来山にいて、再び基地に戻りました。私は
相変わらず匪賊を追い回して脾肉を嘆くばかり。
大きく期待して待った正月でしたけれど、千代子
さんとの婚姻のための休暇は、残念ながら取り消
されてしまいました。」

千秋 おばあちゃんの名前、千代子っていうの？

千代子 そうよ。

千秋 可愛い名前。

尚美 邪魔しないで、(再び読み始める。途

中から声は慎次郎に代る。隣の留蔵は驚
ろいてだらしなく口を開けている)

「この国情の前には、(慎次郎の声) 個人の感情や
生活はあまりにも小さいに違いありません。恐ら
く、千代子さんも期待して待ってくれていたと思
うこの正月も、昨年と同じく空しく去ることとし
よう。私ら軍人には、何事も忘れて軍務に励むこ
とのみが要求されます。(尚美の声) この辺は城壁
のある大きな町です。戦火の後をそのままに、町
の半分は崩れ廃墟と化し、

突然、右翼の街宣車が「軍艦マーチ」を大
音量で流して通る。

千秋 (大声で) うるさい!

尚美 びっくりするじゃん。

千秋 だって、むかつくんどもん、あいつら。

慎次郎 (あわててベンチの下に潜り込もう

として) ああ、空襲かと思いました。あれ

は何ですか?

留蔵 ありや、右翼の街宣車だ。終戦記念日
が近づくと、毎年、ああやって走り回って
る。

慎次郎 なんのために?

留蔵 天皇や総理大臣は、靖国神社に参拝す

れとか叫んでるわ。

慎次郎 靖国神社に、それはどういうことですか?
留蔵 お前えのなんだには、おらも疲

れるわ。(尻に敷いていた新聞を取り)ここでも読んでみる。

慎次郎 (指されたところを読む) A級戦犯十四人を合祀している靖国神社。ここに首相が公式参拝することは、国内外から批判されるのを承知で首相は「尊い命を犠牲にして、国のために倒れたご英霊に対して尊崇の念を表すのは、当然のことであり、」

留蔵は千秋たちの話に気を取られる。新聞を
読み終えた慎次郎も耳を傾ける。

千代子 これがね、あの人からの最期の手紙になったの。

尚美 最後？

千代子 しばらく音信不通が続いてね。そしたら、あの人は戦死していたの。

尚美 そんな！

千秋 ひどい、ひどすぎる……。

千代子 そうよね、ひどすぎるわよね。

千秋 こんなこと言うとなんですけれど、

千代子 何？

千秋 もしもよ、もしもその人が、お正月に

帰って来たら、おばあちゃんたち結婚出来たんで

しよう？

千代子 (頷き)休暇はね、二週間の予定だったの。

たの。両親と一緒にアパートを探して、すぐ入れるようにして待っていたのよ。

尚美 かわいそう……。

千代子 その人、慎次郎さんって言うんだけどね、早稲田の学生のと時から演劇が大好きだったの。

戦争が終わったから自分は劇団を作って、戦争で傷

ついた人たちの心を癒したり、元気が出るような

舞台を一杯創るんだって嬉しそうに話していた

わ。そんな人の命を奪って敗戦。慎次郎さんの命

は一体なんだったのかと思うと悔しくてね。

千秋 みんな戦争が悪いんだ！

千代子 そうよ、戦争はむごいものよ。赤紙

一枚で容赦なく愛する人を戦場へ送り出すんだもの。そして、子供からは父親を、母親からは夫や息子を奪ってしまっただけ聞いてもいいです

尚美 あのもう一つだけ聞いてもいいですか？

千代子 何？

尚美 独身で来たのは、手紙の人のことが忘れられなかつたからですか？

千代子 うーん。当時はね、若い男の人はみんな戦争に取られて、お相手がいなかったからかな。

尚美 ごめんなさい。辛いこと思い出させて……。千代子 いいのよ。あなたたちの話を聞いていたから、話しておきたくなつたの。だつて、あたしたちのような思いを、また、あなたたちにさせたくないもの。だからね、あたしも足の調子がいい時は友達を誘って、官邸前の集まり的自衛権容認の閣議決定取り消しの集まりに参加しているの。

千代子 おぼあちゃんも、あそこの広場に行つてるんだ。そうだ、平和ゼミにおぼあちゃんを招待しようよ。

尚美 いいわね、それ。

千代子 平和ゼミってなに？

千代子 あたしたちの高校でね、終戦記念日に合わせ、生徒会で平和について、「学園祭」をやるの。いろいろなイベントをやるんだよ。映画やコンサートや戦争体験を語る会もあるの。

尚美 千秋のインタビュー流すよりさ、おぼあちゃんに直接話してもらつた方がみんなずっと喜ぶと思う。

千代子 そうよね。その方がいいわよね。おぼあちゃん、迎えに来るからあたしたちの学校に来て話してくれない。

尚美 お願い。昼食会もあるんだよ。おいしいもの一杯作るからさ。

千代子 それならスイトンも作つたら？

尚美 すいとん？ 千秋、知ってる？

千秋 知らない。

千代子 知らないわよね、スイトンなんて。美味しいものじゃないけど、戦中の食べ物だったの。尚美 それって、どんな食べ物なんですか？千代子 あね、小麦粉を水で練って、それをちぎってお団子にして煮るだけの簡単なもの。千秋 それいいかもよ。おばあちゃん、作り方教えて。千代子 いいわよ。あら、もう時間だわ。友達とこの喫茶店で待ち合わせしているのよ。千秋 それじゃ、また連絡していいですか？千代子 ええ、いいわよ。尚美 (ケイタイを持ち) ああ、みどり、こっちは終わったけど、そっちはどう？ じゃさあ、いつものマックで待ってて、すぐ行く。おなかぺこだよ。じゃね。(切る)千秋 おばあちゃん、あたしたちその喫茶店まで送ります。千代子 そう、ありがとう。

千代子は来た時のように二人に付き添われて公園から出て行く。

慎次郎 あの、ちょっと待ってください。千代子さん！ 私です、慎次郎です！千代子 さーん！ (後を追う)留蔵 止めどけ！ おらだちのことは見えねえんだど。慎次郎 ですが、話したいことが、留蔵 今では、どうしようもねえんだって。慎次郎 千代子さんは生きてた？：：。留蔵 ああ、おばあさんが話してだ慎次郎って、お前さんのことが。慎次郎 はい。私は椿慎次郎といいます。留蔵 椿三十郎というのがいだな。そうが、そうだったの。慎次郎 あの人、千代子さんと言いました、私の婚約者でした。留蔵 じゃ、お前は戦死したのが。慎次郎 無念ですが。

留蔵 そりゃ、ごくろうだったな。
慎次郎 そう言って戴けると……あの、女
学生がこんな手鏡のような物を持っていま
したが、あれは何ですか。

留蔵 ケイタイ。
慎次郎 けいたい？

留蔵 携帯電話だ。

慎次郎 携帯電話？ あんな小さな物で電話が出来るん

ですか。電話線も無いのに。

留蔵 日本も便利な世の中になったがらな。

お前には珍しいものばかりだべ。ところで、

お前え暇が。

慎次郎 暇という訳でもないですが。

留蔵 どうだ、一戦やつか？

慎次郎 それじゃ、お相手をさせて戴きます。

二人将棋盤を囲む。やがて、鐘や太鼓を打ち鳴らして原発反対を叫ぶデモが通る。

声 「原発反対！」「子どもたちを、放射能から守り
ましょう！」「原発はいらない！」福島原発事故か
らくすでに三年も過ぎているのに、未だに十五万
人もの住民が避難生活を余儀なくされており
ます。こんな危険な原発は……

慎次郎 今度は軍歌を鳴らしていませんね。

留蔵 あれは、原発反対のデモだ。

慎次郎 げんぱつ？

留蔵 日本の電気はな、昔と違って原子力発電で作

られるんだ。

慎次郎 原子爆弾のことは聞きました。

日本も原子力を使う国になったんですか。でも、

なぜ反対しているんですか？

留蔵 もう三年も前えのことだが、東北で大

っきな地震があつてな、そのあと考えられ

ねえような大つきな津波が押し寄せて来た

のよ。おらの町はその津波に呑み込まれて

全滅した。

慎次郎 全滅って、空襲じゃなかったんですか。

留蔵　空襲は昔の話だ。津波よ、津波。その地震で
な、福島原子力発電所が爆発して、放射能が吹
き出したんだ。
慎次郎　放射能が？
留蔵　詳しいごどは知らねえが、沢山の人が
放射能の届がねえ遠くさ避難してるようだ
慎次郎　留さんはそれでこちらに？
留蔵　こちらって、東京が？
慎次郎　いえ、私たちのいる世界。
留蔵　んだ。
慎次郎　そんなことがあったんですか。
留蔵　お前はどこの出だ。
慎次郎　おらんどごと同じ港町だな。
留蔵　昨日、二十数年暮らした実家を訪ねまし
た。でも、このこと同じで、高いビルが建ち並ん
で、目印だった映画館や風呂場も見当たりません
昭和二十年五月二十九日に横浜は米軍の大
空襲を受け、町は壊滅状態になったことを知りま
した。おそらく私の家族は、その時亡くなったの
だと思えます。
留蔵　お前も故郷を無くしたのが。
慎次郎　王手！
留蔵　何？　ちよ、ちよっと待てや。
慎次郎　待ってもいいですが、一つ条件がありま
す。
留蔵　条件？
慎次郎　留さんは、靖国神社に行ったことはありま
すか。
留蔵　靖国神社？　行ったごどねえ。おらの親父と
兄貴は戦争に行ったが、どつちも無事に帰って来
たんで、あそごとは縁が無いでな。
慎次郎　行ってみませんか。行ってくれるのなら、
待ちます。
留蔵　そうだな。せっかぐ来たんだがら、東京見物
のついでに寄ってみつか。えーど？　…これど
うだ。
慎次郎　それじゃ、王手！
留蔵　なに？　ま、待てや。うーむ、

(頭を抱える)

(暗転)

3・靖国神社

遠くから「海ゆかば」の曲が聞こえて来る

慎次郎 空をつくような大鳥居。留さん、ここが靖国神社です。
留蔵 やっと着いたが。その坂はきつがった。

慎次郎 あのベンチで休みましょう。ほら、あそこに見えるのが、幕末の戊辰戦争で活躍し、陸軍の創設者といわれる大村益次郎の銅像です。

留蔵 そうが。
慎次郎 玉砂利の参道、両側には歌にも歌われた九段の桜です。

二人ベンチに座る。慎次郎は水筒を渡し留蔵はそれを飲む。軍歌と演説の声が聞こえて来る

演説の声 あの、大東亜戦争で東洋平和を願うため、八月十五日には、総理大臣は正々堂々と、この靖国神社に公式参拝すべきである！

慎次郎 あれは軍歌を流しているから、右翼すね。二百三十万もの人がここに祀られて

留蔵 半分ぐらいは餓死や病死だって言う奴もいる。名誉の戦死が野垂れ死にじゃ、英霊も肩身が狭いべ。

慎次郎 それを言われると自分も、立派な戦死じゃなかつたもので。
留蔵 戦死に立派も糞もあるが。

慎次郎 あ、歌を歌ってもいいですか。

留蔵 歌？

慎次郎 ここに戦友がいるのなら、自分が来たことを知らせていんです。

留蔵 お前え、こっから出て来たんじゃねえのが。

好きにせい。お前えに付き合うのは疲れる。

慎次郎 (直立不動の姿勢で歌う)

貴様と俺とは 同期の桜

離れ離れになろうとも

花の都の靖国神社

春の小枝で 咲いて逢うよ

濃紺の詰襟の制服を着た敏夫が、同じ制服を着たマリの肩を抱き、缶ビールを飲みながらやって来てベンチに座る。歌っていた慎次郎は飛びのき、留蔵はあわてて席を空ける。

マリ こう暑くちややってられねえよ。 敏夫、やっぱ、このままトンズラしようぜ。

敏夫 ヤバイってそりや。兄貴にヤキ入れられる

し、ここで消えたらバイト代貰えねえんだぞ。

マリ サルじやあるまいし、こんな物着せられて

さ。

敏夫 マリ、カッコいいぜそれ。記念に一枚。(ケイ

タイで写真を撮る)

慎次郎 若い女が、人前で男の名前を呼び捨てにするのか。それもこんな人通りの多い

所で堂々と、ビールなんか飲んで。日本は一体どうなっているんだ!

敏夫 これが今の日本だ。

マリ チンタラ、チンタラ走り回って、(片

手を上げ)「憲法九条を改えろ!

日本防衛のため、自衛隊を軍隊にせよ!

訳の分からんことになり立て、のどがおかしくなった。

敏夫 もうすぐ終わるで我慢しろって。他の奴らも我慢してるんだぞ。

マリ バイクで突っ走ってる方が、すっきりするわ。(スマートフォンをいじる)

杖をついた高齢の三郎が、人を探すように
うろうろとやって来る。三郎は国民服姿で
ある。

三郎 あの、ちよつと。あの、君たち。

敏夫 なんや。この辺で、モンペ姿のばあさんを見かけなか

三郎 たつたかな。なんや？

敏夫 もんぺ？ なんや？

マリ 知らん。の汗を拭いながら）隣に座らせてもらっていいか
な。

敏夫 あつちへ行きな、ジジイ！

慎次郎 オイ！ 相手はお年寄りだぞ！ 父母ニ考

留蔵 二兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友、
敏夫 なんの念仏だ？ 向こうへ行けってんだ！

慎次郎 君！

三郎はすごすごと去って行く。

敏夫 俺はやっぱ特攻隊だな。

マリ お巡りに突っ込む気。

敏夫 そんなじゃねーよ。そこの、ゆう何

とか館のビデオでやってたじゃねえか。ゼ
口戦の神風特攻隊よ。（歌う）「若い血潮の予科練
の（若鷲の歌）」

慎次郎 止める、止める。へたくそ！

留蔵 お前も他人のこといえんど。

敏夫 なんか言ったか？

マリ （スマホを見ながら）なんも。
敏夫 白いマフラーなびかせてよ、こんな風

に敬礼してゼロ戦に乗り込んで飛び立って行くと
こなんか、最高にカッコいいじゃねえか。

マリ 帰って来れないかもよ。

敏夫 そんなの関係ねえ。兄貴たちの話じゃ
な、もうすぐ自衛隊が戦争始めて今の不景

気をブツ飛ばすんだってよ。そうなたら俺の出番だ。土建屋なんかやってられねえ。すぐ自衛隊に行く。

マリ 自衛隊？

敏夫 男の血が騒ぐのよ。俺は頭悪いが、体力と喧嘩じゃ負けねえ。
マリ 何でもいいいけどさ、早く終わってほしいわ。暑くてたまらんが。

敏夫の投げた空き缶が地面に座っている慎次郎の頭に当たる。

慎次郎 イテッ！　こら、空き缶はゴミ箱に

捨てる！

敏夫 なあ、マリ。バイト代貰ったら江の島までブツ飛ばすか、泳ぎによ。

マリ 水着ないじゃん。

敏夫 どうせ夜だ、そんな物いらねえ。

マリ エッチ！　じゃ、今夜、店休むわ。

敏夫 さあ、行くぞ。集合時間だ。

慎次郎 おい貴様、ちよつと待て！　何が特

攻隊だ。貴様のような道徳もわきまえん者に国が

守れるか！

留蔵 そんなに怒鳴ったって、通じねえって。

千秋と尚美に支えられてモンペ姿の千代子がやって来る。

尚美 おばあちゃん、そのベンチ空いたから。

千代子 すまないねえ。

留蔵 ありや、あの連中。

慎次郎 偶然、また会いましたね。

千代子 (ポシエットを見て) そのお札はな

に？

尚美 これ？　交通安全のお守り。遊就館の

見学に行くって言ったたら、母に頼まれたの。ここ

のは、厄除けのご利益があるんだって。

千秋 あたしも二個。どこの札所もすごい行

列だから、三十分くらい並ばないと買えないよ。

千代子 そんなのがあったとは知らなかったわ。でも、ご利益はどうかしら。

「海行かば」の合唱が聞こえて来る。
千代子が口ずさむと慎次郎もそれに
唱和する。

海行かば水漬くかばね
山行かば草むすかばね

大君の辺にこそ死なめ
かえりみわせじ

千秋 あれはなんという歌ですか？

千代子 「海行かば」といつてね、兵隊さんを送り出すときによく歌ったもんだったわ。

慎次郎 千代子さん、そりやちよつと違うな。戦闘の後で、散乱した戦友の死骸を集めて茶毘に付すときなんかに歌われた歌ですよ。

千秋 何か、哀しいような歌ね。
慎次郎 そうです。昨日まで一本のたばこを分け合
って吸いながら、冗談を言つた戦友もね、焼か
れて骨になると、小さな骨壺に入れられたんで
す。

三郎 姉さん、此処にいたのか。探したんだぞ。

千代子 あら三郎、あんたどこに行つたの。

三郎 姉さんこそどこにいたんだ。

千代子 遊就館のトイレから出た所で目まいがして
倒れたんだよ。もしたら、この人たちが助けにく
れたのよ。

慎次郎 えっ、三郎？ そうか、三郎君か。三郎君
も生きていたのか。

留蔵 オイ、その辺でションベンしてもいいか。
慎次郎 駄目ですよ。向こうで便所を探してください

留蔵 面倒くせいな。(出て行く)

千代子 (ケイタイを出して) ケイタイどう
したの、ちつともつながらないじゃない。

三郎 忘れたんだ。

千秋 どうぞ、心配してました。(千代子の隣に座ら
せる)

に報いるため、いきぎよく命を捨てるべし」と教
えられたものなんだ。

尚美 こうも言うって何ですか？

三郎 鴻毛というのは、おおとりの毛ということ
で、非常に軽いという意味です。

尚美 わたしは、「人の命は、地球より重い」と習い
ました。

三郎 (顔をそむけて) それにしても、最近の若い
者は気概が足らん。そう思わんかね。

尚美 どういうことですか？

三郎 まず学校教育からして、厳しく鍛え直す必要
がある。国を思う心、親を思う心、

そういうものをしつかり教え込まないと駄目だ。
そうでもしなきゃ、この先日本はどうなる。そう

思わんかね。

尚美 もっと、具体的に言ってもらわないと分かり
ません。

千代子 三郎、自分の考えを押しつけるのは止めな
さい。この人はね、校長を長くやっていたせいな

か、頭が固くてね、あたしとは考え方が大分違う
のよ。

三郎 私は男三人女二人、五人兄弟の末っ子でな。
二人の兄はここに眠っている。

千代子 一番上の兄はね、ビルマで戦死したの。戦
死といつても、餓死なのよ。

尚美 餓死？

千代子 戦って死んだんじゃないの。
三郎 姉さん、そういう言い方は止めるよ。

千代子 だって本当のことなんだもの。二番目の兄
はね、シンガポールへ渡る輸送船に乗っていて、

台湾沖でアメリカの飛行機に攻撃を受けて沈没し
たそうなの。

慎次郎 あの人も戦死したのか。

千秋 おじさんはどこへ？

三郎 私はニューギニアの、モロタイ島にい
たんだが、米軍の攻撃を受けて隊は壊滅状態にな

った。私ら数名は終戦も知らずにジャングルの中
を逃げ回っていたんだ。ヘビやヤドカリ等食える
ものは何でも食った。そのうちマラリアで次々と
仲間が死んでな、二人になった時、覚悟を決めて

米軍に投降した。そしたら、捕虜にもならず日本に帰された。

慎次郎 捕虜にならず？ 「生きて虜囚の辱めを受けず、」

千代子 この子が突然帰って来た時は、幽霊かと思つたわよ。母なんか口をぱくぱくさせて、

三郎 目ン玉が飛び出すような顔してな、ハハハハ。

千代子 思わず足を見たの、そうしたらね、痩せこけて骨だらけの細い足が、ちゃんと二本ついていたの。

三郎 男三人の中で生きて帰って来たの私だけだった。だから、母が生きていた頃から、毎年盆になるとこうやって、兄たちに会いに来ていたんだ。

千代子 おかしいでしょうこんな恰好。これはね、母が生前ここに来る時に着ていたものなのよ。

尚美 ここに来る途中「千鳥ヶ淵墓苑」ってところに寄って来ました。参拝者も少なく、説明板には無縁戦没者三十五万人と書かれています。

三郎 あっちは、遺骨の引き取り手が無い者や、お墓にも三国人の墓だ。

尚美 三国人ってなんですか？

三郎 大半は朝鮮人だ。

尚美 でも、戦争で死んだんでしょう。どうして分れてるんですか。

三郎 この靖国神社はだね、天皇のために立派に戦つて戦死した人を「英霊」として祀っている所だ。やつらは日本人じゃない。

尚美 「国のため命ささげし人々のこと」を思えば胸せまりくる」という昭和天皇の碑がありました。

三郎 私は一度も行ったことがないのでな。そんなことは知らん。

いつの間にか、近くで話を聞いていた浮浪者風の老人が、少々酔った格好でふらつきながら近寄って来る。その後ろから転びはしないかと留蔵が心配そうに

付いて来る。千秋と尚美は「酒くさ！」とベンチを離れる。老人はその空いた所に座る。

老人 天皇のために立派に戦ったか。

三郎 何だね、君は。

老人 立派じゃねえ奴らもいたってことよ。

千代子 この爺さん酔ってるわよ。

老人 ああ、酔ってる。あんなのような奴を

見ると腹が立ってな。その女学生さんも

聞いてくれ。立派に戦わなかったわしの話

をよ。

三郎 何がいたいのかな。

老人 わしのいた大陸じゃな、食いものは現地調達

だった。自分の食い扶持は自分で探せてやつ

だ。腹へってな、移動する先々で農家の畑を荒ら

したり、鶏や家畜を盗んで食ったもんだ。そんな

のはまだ序の口よ。

怪しいと睨んだチャンコロは捕まえて容赦なく殺

した。女、子どもでもな。

千代子 なんてことを！

老人 みんな上からの命令よ。軍隊じゃ命令は絶対

なんだ。

尚美 上って誰ですか。隊長さんですか？

千秋 (声をひそめて) 止めなよ。

老人 そりゃ日本で一番偉いお方よ。その人に聞いて

てみな。

千代子 この人に関わっちゃ駄目。この人狂

ってる。

老人 そうよ、軍隊じゃみんな狂ってた。ば

あさん、一つおもしろい昔話を聞かせてや

るわ。

三郎 あんたの話なんか聞きたくもない。

老人 (声を荒げて) 貴様は黙ってる！ わしは、

この、ばあさんに話すんだ。

千秋 尚美、行こう。

尚美 ちよっと待って。

千秋 だって、ヤバくなったらすぐ逃げるよ。

老人 敵を追ってある村に入った時だ。わしは伍長について大きな造りの農家に踏み込

んだのよ。そしたら腰の曲がった爺さんが一人、にこにこしながら、「八路ハ逃ゲタ。モウコノ村ニイナイ」ってな。伍長もニコニコ笑いながら「爺さんもグルなんだろう。南京虫と支那人はひねり潰せってな」そう言うなり爺さんの頭を銃剣で叩き割った。

千代子　なんて、酷いことを！

三郎　止めたまえ！　そんな作り話。

老人　いいから、聞け！

千秋は尚美の手を引いて逃げ出すが、尚美がすぐに動かなくなるので仕方なく少し離れた場所で尚美の後ろに回り様子を伺う。

老人　奥の部屋のベッドの下にな、若い女が

ガタガタ震えて隠れていた。伍長はその女に往復ビンタを食らわして素っ裸にしたのよ。にやにや笑いながら「貴様にもやらせてやるから、そこで見てろ」って女に覆いかぶさった時だけ、伍長の頭から血が飛び散った。わしは夢中でそいつを撃ち殺した。便衣隊の野郎も隠れていたんだ。素っ裸の女は大声上げてそいつに取りすがっていたが、その女の頭もぶち抜いてやった。

千代子　けだもの！

老人　そのけだもの伍長さんもな、ここに祀られているんだ。立派に戦って死んだ英霊としてな。

三郎　そんなありもしない話を吹聴して、神

聖な靖国神社を侮辱するのは止めたまえ！

慎次郎　その話は、まんざら嘘ではありませ

ん。私の部隊でも、酔うと強姦した女の数を自慢し合っていた古参兵もありました。

三郎　私はそんな話は信じない。私の部隊ではそんなことは絶対に許されなかった。姉さん、行こう。(千代子の手を引いて歩き出す)

老人　(ふらふらと立ち上がって歩き出す) 伍長さんよ、わしは戦死しても、一緒にここには入れなかつた。

尚美　(後を追いかけて) あ、ここに入れなかつたって、どうしてですか？

老人 どうして？ わしはな、奴が言ってた三国人

尚美 だからよ。(立ち去って行く)

千秋 あれ、本当の話だと思おう？

慎次郎 分かんないよ、そんなこと。

からね。いざとなったら、倫理とか道徳な

んてものは、残念ながらあんまり役にた

ないんだよ。それからね、兵隊なんても

は、紙切れ一枚で集められた戦争の消耗品

みたいなものさ。

千秋 何か、いやーな感じ。こんなとこ来るんじや

尚美 なかった。帰ろう。

留蔵 おらだちも帰るが。その辺で冷えたビールを

きゅーと飲みてえな。

「原爆許すまじ」を歌うコーラスの

歌声が聞こえて来る。(暗転)

4・日比谷公園。

ベンチに座る慎次郎と留蔵。

留蔵 どうしたシン、元氣ねえな。疲れたが。

慎次郎 見て下さい。あの木の下で横になっている

留蔵 うす汚れた服装の人たち。

慎次郎 ありや、浮浪者だ。

で、街には食料やぜいたく品が氾濫しているの

に、あちこちであのような人を何人も見かけまし

た。

留蔵 景気がいいように見えでも、一方じゃ首切り

やってる会社も多いが。最近は何奴もいるが

ら、仕事も無いんだべ。なんせ毎年、三万人もが

自殺してるっていう世の中だから。

慎次郎 ええっ、三万人？ 自殺の原因はなんです

か。

留蔵 貧乏と病気が一番多いって、新聞に書いてあ

ったな。あの連中は、汚いって公園がら追っ払わ

れてるんだ。それでもすぐどっかがら集まってくるがら、役所も困ってるようだ。

慎次郎 これじゃ、貧しさから娘を身売りしたり、都会のあちこちの公園にルンペンがごろごろ転がっていった昔と変わらんですよ！ 日本はどうしてこんな国になってしまったんですか！

留蔵 急にそんなごど、おらに言われでも。慎次郎 こんなはずじゃなかったんだ。自分らが戦っていたあの頃、思い描いていた日本は！ 日本人が大切に生きてきた思いやりとか、義理人情は、一体どこへ行つてしまつたんですか！

留蔵 だがら、おら、政治家じゃないんだって。慎次郎 こんな日本を作るために、自分たちは命を捨てたのかと思うと、虚しいです。

留蔵 まあ、なつちまつたものは仕方ないべ。そう、カツカすんなや。

慎次郎 期待して来たのに……明日、帰ります。留蔵 帰る？ お前えは、どうやってこつちに来たんだ。

慎次郎 こつちに？ ああ、それは……、留蔵 言いたぐながつたら、いいど。

慎次郎 いえ、留さんにだけは話して帰ります。酔つた老人が話していたこと覚えていますか。

留蔵 ああ、あの、若い女を素っ裸にしたって話が。

慎次郎 満州で自分たちの部隊も、あの老人の話と似たようなことをしながら前進してました。当時、「三光作戦」というのがありましてね。この言葉、聞いたことありますか？

留蔵 さんこう？ 知らねえ。

慎次郎 サンコウとは三つの光と書きます。これは、殺し尽くす、焼き尽くす、奪い尽くすというもので、とても作戦などと呼ばべ

るものではありません。私たちの部隊は集落を見つけると逃げ出した住民が戻つて来ても住むことが出来ないように民家や畑の穀物など全てを焼き払いました。これはその地域から住民を追い出す

ためでした。私は燃えている高粱畑の近くを通りかかった時、赤ん坊の泣き声のようなものを聞きまじった。その辺はまだ火が回って来てなかったの。近づく。農家の主婦のような女性が死んでいました。強姦され胸を刺されたような女性に染まっていた。血だらけの乳房に幼子がしがみついていた。火が風に煽られて近づいて来た。その夕方、崖下に数軒の農家がある所で露営する。とになりました。勿論、住民は逃げ出して誰もいません。私は将校の地位を利用して、高粱畑で女性を殺害した兵を探すように命じました。犯人はすぐに見つかりました。鋭い眼つきをした身体の大きな古参兵でした。私はその古参兵を小さな掘立小屋があつたのでその中に連れ込んで、軍の規律で禁止されていゝ鉄拳制裁を加えました。

とところがその古参兵は逆上して、「この若造が何さらすか！」と私に掴みかかり格闘になりました。どこで手にしたのか振り回した鎌が私の喉に突き刺さりました。私は夢中で腰の拳銃を握り撃ちました。相手が大声を上げて倒れるのを見たのが最期です。犯しました。こんな処置が取られたのかは分かりません。これがすべてです。お前えを責める留蔵 お前えはいい兵隊だったな。お前えを責める奴はいねえべ。

鐘や太鼓を打ち鳴らし、賑やかなデモが通る。「戦争はごめんだ！」「戦地に自衛隊を送るな！」「集団的自衛権の閣議決定を撤回せよ！」「憲法九条を守ろう！」等の声が聞こえて来る。

留蔵 ほれ、賑やかなデモが来たようだ。(ベンチの上)に立って眺める。ずいぶん長い行列だ。東京は人が多過ぎて、暇人も多いんだなあ、ようこれだけ集まったもんだ。ありや？ オイ、シン、見ろ！ あの連中もいるぞ。

慎次郎 えっ？（ベンチに立つ）

留蔵 ほら、あそこ。女子高生に囲まれて、お前

のばあさん、白い帽子かぶって。

慎次郎 あっ、千代子さんだ。千代子さんが

歩いてる。それにしても、ずいぶん女学生

の数が増えましたね。女学生が歌を歌って

いますね。あそこにアコーデオンを弾いて

る人もいますよ。楽しそうなデモですね。

続いて「原発を停止せよ！」「原発は

廃炉にせよ！」「危険な原発はいらな

い！」「福井地裁はく大飯原発のく運

転差し止めを命じています」等、原

発反対のシュプレヒコールや復興ソ

ング「花は咲く」の歌声も聞こえて

来る。

留蔵 こっちは原発反対が。ありゃ、正子だ。

慎次郎 正子がいる。オイ、正子！

留蔵 おらの娘だ。あそこ、あそこ。ほれ、大つき

なひまわりの花描いた紙を親子三人で持って歩い

でる。

慎次郎 娘さんは福島じゃなかったんです

か。

留蔵 正子は東京だ。正子の向こうの巨人の

野球帽かぶった男の子が、孫の翔で、こっちが妹

の唯だ。

慎次郎 あの、赤いランドセルを背負ってる

女の子？

留蔵 なんだ。唯の奴ランドセルなんか背負っ

て。見れ、可愛いべえ。あの赤いランドセ

ルはな、おらが入学祝いを買ってやったん

だ。もう、三年も前えの話だが。

慎次郎 三年前？

留蔵 唯の奴、おらにランドセル見せようと

してるんだべ。おらは、唯の晴れ姿を、見

れなかつたがらな。（涙を拭う）

慎次郎 留さん、行きましたよ。唯ちゃんと一緒に歩きましたよ。私も千代子さんと一緒に歩きました。

留蔵 そうだな、そうするが。オーイ、翔！
唯！ じいちゃんだど！ じいちゃんも一緒に行ぐど！

慎次郎と留蔵は飛び出して行く。
「戦争反対！」「原発反対！」のシュプレヒコールが聞こえる。(暗転)

5・エピローグ

青いシートの上でくつろいでいる正子。波の音が聞こえている。

正子 唯！ ほら、波が来るよ！ 早く立ちなさい！ ああ、被っちゃった。もう、何してるのよ！

留蔵 (レジ袋を提げてやって来る) 何大声出しでる。ほら、アイス買って来たど。

正子 ありがとう。あれ見てよ、唯ったら頭から波を被ってべとべと。翔も笑ってない

で助けてやればいいのに。まったく気の利かないお兄ちゃんなんだから。(立ち上がろうとする)

留蔵 いいがら放つどけ。翔！ 服なんか脱いで、フリチンで遊べ！

正子 止めてよ、お父さん、恥ずかしい。翔！ 駄目よ、おじいちゃんの言うことなんか聞いたら！

留蔵 だから水着持って行くこうって言ったのに。だ。おらなんが、中学までフリチンで泳いだもんだ。ホツケの留蔵ってちよつと有名だったんだど。

正子 それは、五十年以上も昔のことでしょう。あんたたち、アイス食べる！

留蔵 いらねえってよ。波と遊んでる方がいい

正子 じゃ、あたしが食べようつと。お父さん

も食べる？

留蔵　いらねえ。ありや、ビール買いに行つ
でビール買って来るの忘れだ。最近、物忘
れが多くなつてな。(笑う)

正子　仕方ないわよ、もう七十なんだから。

留蔵　まだ、六十九だ。

正子　ああ、やっぱり三陸の海はきれいだわ。ここ
に来ると心が洗われる。

留蔵　それが故郷って言うもんだべ。正子、
忠くんも一緒に連れて来たらいがったべや。

正子　あの人は仕事人間だから、夏休みもな
いんだわ。電力会社つてさ、夏場は特に忙しいよ
うだし。

留蔵　そうがあ。しかし、早えもんだなあ。唯も来
年の春は小学生があ。ばあさんにも見せてやりた
がったなあ。

正子　お母さん、病院のベッドでそればかり言っ
てたわ。唯はさ、この前お父さんが送ってくれた
赤いランドセル背負つて、楽

しそうに歌を歌いながら部屋の中を歩き回
つてるんだ。

留蔵　そうがあ。

正子　ねえ、お父さん。東京に来て一緒に住
もうよ。お父さんの部屋もあるんだから。

留蔵　まだ、その話が。

正子　だって、ここでの一人暮らしが心配なのよ。
何かあった時、すぐに来るといふわけにもいかな
いしさ。東京ドームでお父さ

留蔵　んのかな。巨人戦を好きだけ見せてあげるよ。
留蔵　東京ドームはいいなあ。テレビで見るのとは
全然迫力が違うがらな。ところで忠くん、転勤は
ねえのが。

正子　転勤？

留蔵　だがら、こっちの福島原発に来るどが。そし
だら、おらんどごで一緒に住めるべ。

正子　それはないと思うわ。暮らすならやっぱり東
京の方が便利だもの。

留蔵　そうがあ、それを期待してたんだがなあ。そ
んじや、船を処分しで、唯の入学までにはそっち
に引っ越すが。

正子 約束だよ。あの子たちも喜ぶわ。こら、翔。
だめ、海に入ったら！　そこで止まちなさい！
（飛び出して行く）
留蔵 翔！　泳いで逃げろ！　（笑いながら見ている）

徐々に明かりが消えて行く。舞台が暗くなる。同時に、大きな爆発音がして閃光が走る。

—（幕）—